

湯女の魂

泉鏡花

青空文庫

誠に差出がましく恐入りますが、しばらく御清聴を煩わします
る。

八宗の中にも真言宗には、秘密の法だの、九字くじを切るだのと申
しまして、不思議なことをするのでありますが、もつともこの宗
門の出家方は、始めから寒垢離かんごり、断食など種さまざま々な方法で法を修しゆ
するのでございまして、向うに目指す品物を置いて、これに向つ
て呪文じゆもんを唱え、印を結んで、鍊磨の功を積むのだそうでありま
す。

修鍊の極致に至りますると、へきすいかとん 隠身避水火遁の術などはいうまでもございませぬ、如意自在な法を施すことが出来るのだと申すことで。

ある真言寺のでら小僧が、夜分墓原を通りますと、樹と樹との間に白いものがかかつて、ふらふらと動いていた。暗さは暗し、場所柄は場所柄なり、おそろし可恐さの余り齒の根も合ふるわず顫え顫え呪文を唱えながら遁にげ帰りましたそうでありますが、翌日見まするとそこに乾かしてございました浴衣が、ずたずたに裂けていたと申しますよ、修行もその位になりましたこの小僧さんなぞのは、向つて九字を切ります目当に立てておく、竹切、棒などが折れるとい

います。

しかし可加減いな話だ、今時そんなことがある訳のものではないと、ある人が一人の坊さんに申しますと、その坊さんは黙ほつて微笑ほえみながら、拇おやゆび指を出して見せました、ちと落語家はなしかの申しますこんにやく蒟問答このようでありますけれども、その拇指を見せたのであります。

そして坊さんが言うのに、まず見た処みせこの拇指に、どの位な働きがあると思わつしやる、たとえば店頭みせさきで小僧どもが、がやがや騒いでいる処へ、来たよといって拇指を出して御覧なさい、びつたりと静しずりましよう、また若い人にちよつと小指を見せたらどうであろう、銀座とおりの通で手を挙げれば、鉄道馬車とまが停とまるではなからうか、も一つその上に笛を添えて、片手をあげて吹鳴らす事に

なりますと、ステイション停車場を汽車が出ますよ、使い処、用い処に因つては、これが人命にも関われれば、喜怒哀樂の情も動かします。これをでかばちに申したら、国家の安危に係かかわるような、おり機会がないとも限らぬ、その拇指、その小指、その片手の働きで。

しかるをいわんや りんび臨兵闘者皆陣列在前 りようひ といひ、令百

やくゆじゆんないむしよあいげん 由旬内無諸哀艱

と唱えて、四縦五行の九字を切るにおいて

は、いかばかり不思議の働をするかも計られまい、と申したということを聞いたのであります。

いや、余事を申上げまして恐入りますが、ただいま唯今私が ふつつか不束に

演じますのお話の中頃に、ひとつや山中孤家の怪しい婦人おんなが、ちちんぷ

いごよい御代おんたからの御宝と唱えて こうもり蝙蝠の印を結ぶ処がありますか

ら、ちよつと申上げておくのであります。

さてこれは小宮山良介こみやまという学生が、一夏ある北陸道を漫遊しました時、越中の国の小川という温泉から湯女の魂ゆなを託ことづかつて、遙々はるばる東京まで持つて参つたというお話。

越中とまりに泊と云つて、家数千軒ばかり、ちよつと繁昌はんじような町があります。伏木ふしきから汽船に乘りますと、富山の岩瀬、四日市、魚津、泊となつて、それから糸魚川いといがわ、関せき、親不知おやしらず、五智を通つて、直江津へ出るのであります。

小宮山はその日、富山を朝立あさだち、この泊の町に着いたのは、午後三時半頃。繁昌な処と申しながら、街道が一条海ひとすじに添つておりますばかり、裏町、横町などと、謂いつてもないのであります、

その町の半頃なかばのと有る茶店へ、草臥くたびれた足を休めました。

二

渋茶を喫しながら、四辺あたりを見る。街道の景色、また格別でございまして、今は駄路の鈴の音こそ聞えませぬが、馬、車、処の人々、本願寺詣もうでの行者の類、これに豆腐屋、魚屋、郵便配達などが交まじつて往来引きも切らず、「早稲わせの香や別け入る右は有磯海ありそうみ」
という芭蕉の句も、この辺あたりという名代の荒海あらくみ、ここを三十噸とん、乃至ないし五十噸の越後丸、観音丸などと云うのが、入れ違ひまする煙の色も荒海のっこを乗越のすためか一際濃く、且つ勇ましい。

茶店ちやみせの裏手は遠近おちこちの山また山の山続きで、その日の静かな海面よりも、一層かえつて高波うねを蜿うねらしているようでありました。

小宮山は、快く草臥くたびれを休めましたが、何か思う処あるらしく、この茶屋の亭主を呼んで、

「御亭主、少し聞きたい事があるんだが。」

「へい、お客様、何でござりますな。」

氷見鯖ひみさばの塩味、放生ほうじょうづだら津鱈しんげいの善悪よしあし、糸魚川の流れ塩梅あんばい、五智ごちの如来にょらいへ海豚いるかが参詣さんけいを致しまする様子、その鳴声、もそつと遠くは、越後の八百八はっぴやくやこけ後家の因縁いんげんでも、信濃川の橋の間数まかずでも、何でも存じておりますから、ははははは。」

と片肌脱、身も軽いが、口も軽い。小宮山も莞爾にっこりして、

「折角だがね、まずそれを聞くのじゃなかつたよ。」

「それはお生憎あいにくさま様でござりまするな。」

何が生憎。

「私の聞きたいのは、ここに小川の温泉と云うのがあつて、その事なんだがどうだね。」

「ええ、ござりまするとも、人足ひとあしも通いませぬ山の中で、雪の降

る時白鷺しらさぎが一羽、疵所きずしよを浸しておりましたのを、狩人の見附

けましたのが始りで、ついこの八九年前から開けました。一体、

この泊のある財産家の持地でござりまするので、飯ほんの小屋掛で近在ほんの者へ施し半分に遣やつておりました処、さあ、盲目めくらが開く、蹙いざりが

立つ、子供が産れる、乳が出る、大した効能。いやもう、神のごとしとござりまして、所々方々から、彼岸詣ひがんもつでのように、そろそろと入湯に参りまする。

ところで、二階家を四五軒建てましたのを今では譲受けた者がござりまして、座敷も綺麗、お肴さかなも新らしい、立派な本場の温泉となりまして、私はかような田舎者で存じませぬが、何しろ江戸の日本橋ではお医者様でも有馬の湯でもと云うた処を、芸者が、小川の湯でもと唄うそうでござりますが、その辺は旦那御存じでござりましような。いかが様で。」

あべこべ 反対に鉄砲を向けられて、小宮山は開いた口が塞ふさがらず。

「土地繁昌もといの基もとで、それはお目出度い。時に、その小川の温泉ま

では、どのくらいの道だろう。」

「ははあ、これからいらつしやるのでござりますか。それならば、山道三里半、車くるま夫などにお尋ねになりますれば、五里半、六里などと申しますが、それは丁場の代価ねだんで、本当に訳はないのでござりまする。」

「ふむ、三里半だな可よし。そして何かい柏屋かしわやと云う温泉宿は在るかね。」

「柏屋！ ええもう小川で一等の旅籠屋はたごや、畳もこのごろ入換えて、障子もこのごろ張換えて、お湯もどんどん沸いております。」

と年甲斐もない事を言いながら、亭主は小宮山の顔を見て、いやに声を密ひそめたのでありますな、怪けしからん。

「へへへ、好いい婦おんな人が居おりますすぜ。」

「何を言いっているんだ。」

「へへへ、お湯ゆをさして参まりましようか。」

「お茶ちやもたんと頂たいたよ。」

と小宮山は傍わきを向むいて、飲のみさしの茶ちやを床しょうぎ几ぎの外そとへざぶり明あけて身み支し度どに及およびまする。

三

小宮山は亭主ていしゅの前まへで、女おんなの話わたりを冷然れいぜんとして匆はね附つけましたが、密ひそかに思おもう処ところがないのではありませぬ。一いっ体たいこの男おとこには、篠田しのだと云い

う同窓の友がありまして、いつでもその口から、足下そつかもし折があつて北陸道を漫遊したら、泊から訳はない、小川の温泉へ行つて、柏屋と云うのに泊つてみる、於雪おゆきと云つて、根津や、鶯うぐいすだに谷では見られない、田舎には珍らしい、佳いい女が居るからと、度々聞かされたのでありますが、ただ、佳いい女が居るとばかりではない、それが篠田とは浅からぬ関係があるように思われます、小宮山はどの道一泊するものを、乾燥無味な旅籠屋に寝るよりは、多少色艶いろつやつぽいその柏屋へと極きめたので。

さて、亭主の口と盆の上へ、若なにかし干かお鳥目をはずんで、小宮山は紺飛白こんがすりの単衣ひとえ、白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおび、麦藁帽子むぎわら、脚絆きやはん、草鞋わらじという扮装いでたち、荷物を振分にして肩に掛け、既に片影が出来

ておりますから、蝙蝠傘こうもりがさは畳ひつさんで提ひつさげながら、茶店たを発たつて、
これより従したがては小川温泉道と書いた、傍ぐい示ぐい杭つに沿ついて参まりまする。

行ゆくことおよそ二里ばかり、それから爪つまさき先あが上ありのだらだら坂
 になつた、それを一里半、泊とまりを急いそぐ旅人の心には、かれこれ三里
 余も来たらうと思つと、ようやく小川の温泉に着きましてござい
 まする。

志す旅籠屋は、尋ねると直ぐに知れた、有名なもので、柏屋金
 蔵。

そのまま、ずっと小宮山は門かどぐち口かかに懸かかりまする。

「いらつしやいますし。」

「お早つぎいお着。」

「お疲れ様で。」

と下女おんな共が口々に出迎えまする。

帳場に居た亭主が、算盤そろばんを押遣つて

「これ、お洗足すすぎを。それ御案内を。」

とちやほや、貴公子に対する待遇もてなし。服装もお聞きの通り、そ

れさえ、汗に染み、埃ほこりに塗れた、草鞋穿わらじばきの旅人には、過ぎた扱

いをいたします。この温泉場は、泊からわずか四五里の遠いで、

雪が二三尺も深いのでありまして、冬向は一切浴客よっかくはありません

んで、野猪しし、狼、猿たぐいの類、鷺さぎの進しん、雁かり九郎など云う珍客に明

け渡して、旅籠屋は泊の町へ引上げるくらい。賑にぎわいますのは花の

時分、盛夏さんぷく三伏ころおの頃、唯今はもう九月中旬、秋の初はじめで、北国ほっこく

は早く涼風すずかぜが立ますから、これが逗留とうりゆうの客と云う程の者もなく、二階も下も伽藍堂がらんどう、たまたまのお客は、難船が山の陰を見附けた心持でありますから。

「こつちへ。」と婢女おんなが、先に立つて導きました。奥座敷上段の広間、京間の十畳で、本床附ほんどこ、畳は滑るほど新らしく、襖天井ふすまは輝くばかり、誰たれの筆とも知らず、薬草を銜くわえた神農様の画像の一軸、これを床の間の正面に掛けて、花は磯馴そなれ、あすこいらは遠州が流行りまする処で、亭主の好きな赤烏帽子あかえぼし、行儀を崩さず生かっている。

小宮山はその前に、悠然と控えました。

さて、お茶、煙草盆たばこ、御挨拶ごあいさつは略しまして、やがて持つて来

た浴衣に着換えて、一風呂浴びて戻る。誠や温泉の美しくしき、肌骨までも透通り、そよそよと風が身に染みる、小宮山は広袖どてらを借りて手足を伸ばし、打うちくつろ縦こしいでお茶菓子の越こしの雪、否、広袖だの、秋風だの、越の雪だのと、お愛想までが薄ら寒い谷川の音もの寂しい。

湯上りで、眠気は差したり、道中記を記つけるも懶ものうし、入いる時帳場で声を懸けたのも、座敷へ案内をしたのも、浴衣を持って来たのも、お背中を流しましょうと言ったのも、皆手隙てすきと見えて、一人々々入いれかわ交あったが、根津、鶯谷はさて置いて柳原にもない顔だ、於雪と云うのはどうしたろう、おや女の名で、また寒くなつた、これじゃ晩あつかんに熱あつかん爛あつかんで一杯遣らずばなるまい。

四

鮎あゆの大きいのは越中の自慢でありますが、もはや落鮎あゆになつて
 おりますけれども、放生津ほうじょうづの鱒たらや、氷見ひみの鯖さばより優ましであります
 から、魚田ぎよでんに致いたさせまして、吸物すいぶつは湯山ゆさんの初茸はつたけ、後は玉子たまご
 焼やきか何かで、一銚子ちやうしつけさせまして、杯洗はいせんの水を切るのが最は
 初はつ。

「姉さん、お前に一つ。」

などと申しますする時分には、小宮山も微醉ほろよ酔機嫌げん、向うについ
 ておりますのは、目指すお雪ではなくて、初霜とや謂いわむ。薄く

塗った感心に襟脚の太くない、二十歳はたちばかりの、愛あい嬌きょうたつぷりの女で、二つ三つは行ける口、四方山よもやまの話も機はずむ処から、小宮山も興うしろに入り、思わず三四合を傾けます。

後の花が遠州で、前の花が池の坊に座を構え、小宮山は古流という身で、くの字になり、ちよいと杯を差置きましたが、

「姉さん、新らしく尋ねるまでもないが、ここはたしか柏屋だね。」

「はい、さようでございますよ。」

「柏屋だとするとその何、姉さんが一人ある筈はずだね。」

「みんなよったり皆で四人。」

「四人？ 成程四人かね。」

「お喜代さん、お美津さん、お雪さんに私でございます。」

「何、お雪さんと云うのが居る？」

と小宮山は、金の脈を掘当てましたな、かねての話が事実となつたのでありますから、漫そぞろに勇んだので乗出しようが尋常事ただごとではありませんから、

「おや。」

小宮山はわざとらしく威儀を備え、

「そうだ、お前さんの名は何と云う。」

「そうだは御挨拶でございますこと、私は名も何なんにもございません

よ。」

「いいえさ、何と云うのだ。」

「お雪さんにお聞きなさいまし、貴方は御存じでいらつしやるんだよ、可憎にくらしゆうございますねえ、でもあのお気の毒さまでございますこと、お雪さんは貴方、久しい間病気で臥ふせっておりますが

」

「何、病気だい、」

「はあ、ぶらぶら病やまいなんでございますが、このごろはまた氣候が変りましたので、めつきりお弱よわんなすつたようで、取乱しておりますけれど、貴方御用ならばちよいとお呼び申してみましようか。

「いえ、何、それにや及ばないよ。」

「あのおう、きつと参りましようよ、外ならぬ貴方様の事でございます

ますもの。」

「どうでしょうか、此方こなた様にも御存じはなしさ、ただ好いい女だつて途中で聞いて来たもんだから、どうぞ悪あしからず。」

「どうぞ致しまして、憚はばかりさま様。」

と言つたばかり、ちよいと言葉が途絶えましたから、小宮山は思い出したように、

「何と云うのだね、お前さんは。」

「手前は柏屋でございます。」

小宮山は苦にが笑わらいを致しましたが、已やむ事を得ず、

「それじゃ柏屋の姉さん、一つ申上げることによしう。」

「まあお酌を致しましょう。私だつて可いいじゃありませんか、あ

れさ。」

「いや全く。お雪さんでも、酒はもう可かんのだよ。」

「それじゃ御飯をおつけ申しませう、ですがお給仕となるとなおの事、誰かにおさせなさりとうございませうね。」

「何、それにや及ばんから、御^{ごひいき}臈分に盛^{もり}を可^よく、ね。」

「いえ、道中筋で盛の可いのは、御家来衆に限りませうとさ、殿様は軽^{しやれ}くたんと換えて召^{めしあが}食^{めし}りまし。はい、御膳^{ごぜん}。」

「洒落^{しやれ}かい、いよ柏屋の姉さん、本当に名を聞かせておくれよ。」

「手前は柏屋でございます。」

「お前の名を問うのだよ。」

「手前は柏屋でございます。」

と上手に御飯を装よそいながら、ぼたぼた愛嬌を溢こぼしますよ。

五

御膳の時さえ、何かと文句があつたほど、この分では寝る時は容易でなかうと、小宮山は内々恐縮をしておりますが、女は大人しく床を伸べてしまいました。夜具は申すまでもなく、絹布けんぷの上、枕まくらもと頭の火桶ひおけへ湯沸ゆわかしを掛けて、茶盆をそれへ、煙草盆に火を生ける、手当が行届くのであります。

あまりの上首尾、小宮山は空可恐そらおそろしく思っております。女は慇懃いんぎんに手を突いて、

「それでは、お緩り御寝みなさいまし、まだお早うございますから、私共は皆起きております、御用がございましたら御遠慮なく手をお叩き遊ばして、それからあのお湯でございませうが、一晚沸いておりますから、幾度でも御自由に御入り遊ばして、お草臥にも、お体にも大層利きますんでございますよ。」

と大人しやかに真面目な挨拶、殊勝な事と小宮山も更り、
「色々お世話だった。お蔭で心持好く手足を伸すよ、姐さんお前ももう休んでおくれ。」

「はい、難有うございます、それでは。」

と言つて行こうとしましたが、ふと坐り直しましたから、小宮山は、はてな、柏屋の姐さん、ここらでその本名を名告るのかと

可笑しくもございまする。

すると、女は後先をみまわりましたが、じりじりと寄つて参り、

「時につかぬ事をお伺い申しまして、恐れ入りますが、貴方は方々御旅行をなさいますして、可恐しい目にお逢い遊ばした事はございませんか。」

小宮山は、妙な事を聞くと思いましたが、早速、

「いや、幸い暴風雨にも逢わず、海上も無事で、汽車に間違もなかつた。道中の胡麻ごまの灰などは難有ありがたい御代みよの事、それでなくつても、見込まれるような金子かねも持たずさ、足も達者で一日に八里や十里の道は、団子かじを嚙つて野々宮高砂たかさごというのだから、ついぞまあこれが可恐おそろしいという目に逢つた事はないんだよ。」

「いえ、そんな事ではないのでございます。狸が化けたり、狐が化けたり、大入道が出ましたなんて、いうような、その事でございます。」

「馬鹿な事を言っちゃ可かん、子供が大人になつたり、嫁が姑になつたりするより外、今時化けるって奴があるものか。」

と一言の許に笑つて退けたが、小宮山はこの女何を言うのかしらと、かえつて眉毛に唾を附けたのであります、女は極く生真面目で、

「実はお客様、誠に申兼ねましたが、少々お願いがございますんですよ、外の事ではありませんが、さつき貴方のお口からも、ちよいとお話のございました、あのお雪さんの事でございますが、

佳いい女はなぜあんなに体が弱いのでございましょうねえ。平生ふだんからの処へ、今度煩わづらい附つきまして、もう二月三月、十日ばかり前から、また大変たいへんに悩なやみますので、医者いしやと申しまして、三里も参まらねばなりません。薬くすりも何も貴方あなた何の病びやう気きだか、誰たれにも考えかんがえが附つきませぬので、ただもう体の補おぎないになりますようなものを食べさしておくばかりでございしますが、このごろじや段々や瘦やせ細こつて、お粥かゆも薄うすいのでなければ戴いたかないようになりました。気心きしんの好いい平ふ生だん大人おとなしい人ひとでありますから、私共わたくしども始め御主人ごしゆじんも、かれこれ氣きを揉もんでおりますけれども、どこが痛いたむというではなし、苦くるしいというではなし、勞いたりようがないのでございしますよ。それでね、貴方あなた、その病びやう気きと申ましますのが、風邪かぜを引ひいたの、お肚なかを痛いためたの

というのではない様子で、まあ、申せば、何か生いきり靈りょうが取と着ついたとか、狐が見込んだとかいっているのでございましょう。何でも悩なみ方が変なのでございますよ。その証拠には毎晩同じ時刻に魘うなされましてね。」

小宮山も他人ひとごとのようには思おもいませぬ。

六

「その時はどんなに可恐おそろしゆうございましょう、苦しいの、切きないの、一層殺して欲しいの、とお雪さんが呻うめきましたして、ひいひい泣なくんでございますもの、そしてね貴方、誰たかを掴つかまえて話わでもす

るように、何だい誰だ、などと言うではございませんか、その時はもう内曲うちわの者一同、傍そばへ参りますどころではございせんよ、何だつて貴方、異類異形のものが、病人の寝間にむらむらしておりますようで、遠くにいて皆みんなが耳を塞ふさいで、突伏つつぶしてしまひますわ。

それですから、その苦しみます時傍そばに附ついていて、撫なで擦さりなどする事は誰けも怪我がにも出来ません。病人は薬より何より、ただ一晩おちおち心持好ねく寐ねて、どうせ助らないものを、せめてそれを思い出だにして死しにたいと。肩息で貴方ね、口癖くせのように申ますんですよ、どうぞまあそれだけでも協かえてやりやりたいと、皆みんなが心配をしますんですが、加持祈かじきとう禱とうと申しましても、どうして貴方ここい

らは皆狸みんなの法印、章魚たこの入道あてばかりで、当あてになるものはありや
しませぬ。

それに、本人を倚掛よっかからせますのには、しつかりなすつて、自
分でお雪さんが頼母たのもしがるような方でなくつちや可いけますまい、
それですのにちよいちよいお見えなさいまする、どのお客様も、
お止し遊ばせば可いのに、お妖怪ばけと云いえば先方さきで怖おそがります、田
舎いの意気地くじ無しばかり、俺おいらは蟒蛇うわばみに吞のまれて天窓あたまが兀はげたから
湯治みみずに來たの、狐みみずに蚯蚓みみずを食くわされて、それがためお肚なかを痛いためた
の、天狗てんぐに腕うでを折こられたの、私共わたくしが聞きいてさえ、馬鹿ばか々々しいよ
うな事を言いつて、それが真面目まじめだらうじやありませんか。
ですもの、どうして病人びやうじんの力ちからになんぞ、なつてくれる事が出来

ましよう。

こう申しちや押着けがましゆうございますが、貴方はお見受け申したばかりでも、そんな怪しげな事を爪先へもお取上げ遊ばすような御様子は無い、本当に頼母しくお見上げ申しますんで。

実は病人は貴方の御話を致しました処、そうでなくつてさえ東京のお方と聞いて、病人は飛立つばかり、どうぞお慈悲にと申しますのは、私共からもお願い申して上げますのでございますが、誠に申しかねましたが、一晩お傍そばで寝かしくださいまして、そうして本人の願ねがいを協かなえさしてやつて下さいまし、後生でございませうから。

それに様子をお見届け下さいますれば、どんなにか難ありがと有うござ

ございましたよ。」

としみじみ、早口の女の声も理に落ちまして、いわゆる誠はその色に^{あらわ}顯れたのでありますから、唯今怪しい事などは、身の廻りひやく^{ひやく}ゆじ^{ゆじ}ゆん^{ゆん}の内へ寄せ附けないという、見立てに^{あずか}預りました小宮山も、これを信じない訳には行かなくなつたのであります。

「そりや何しろとんだ事だ、私は武者修行じやないのだから、妖怪を退治するという^{うでつぷし}腕^{うで}節^{つぷし}はないかわりに、幸い^{おくび}臆^び病^{びょう}でないだけは、御用に立つて、可いとも！ 望みなら一晩看病をして上げよう。ともかくも今のその話を聞いても、その病人を^{そば}傍へ寝かしても、どうか^{おそろ}可恐^{おそ}しくないように思われるから。」

と小宮山は友人の情婦^{いろ}ではあり、煩^{わづら}っているのが可哀^{あはれ}そうでも

あり、殊には血氣さかん壯なもの的好奇心も手伝つて、異議なく承知を致しました。

「しかし姐ねえさん、別々にするのだろうね。」

「何でございます。」

「何その、お床の儀だ。」

「おほほ、お雪さんにお聞きなさいまし。」

「可うるさ煩いな、まあ可いや。」

「さようならば、どうぞ。」

「可よし可し。そのかわり姐さん、お前の名を言わないのじや……

、
「

「手前は柏屋でございます。」

と急いで出て行く。

これからお雪、良助、寝物語という、物もの凄すごい事に相成りまする。

七

「これは旦那様。」

入交つて亭主柏屋金蔵、揉もみ手をしながらさきに挨拶に来た時より、打解なれなれけまして馴なれなれ々々しく、

「どうも行届きませんで、御粗末様でございます。」

「いや色々、さあずツとこちらへ、何か女中が御病気だそうで、

お前さんも、何かと御心配でありましょう。」

「へい、その事に就きまして、唯今はまた飛んだ手前勝手な御難

題、早速御聞濟おききずみ下さいまして何とも相済みませぬ。実は私から

お願い申しまする筈はずでござりましたが、かようなものでも、主人あるじ

と思おほしめ召し、成りませぬ処をたつても御承知下さいますようでは、

恐れ入りまするから、御断おことわりの遊ばし可いよう、わざと女共か

ら御話を致させましたのでござりまするが、かように御心安く御

承諾下さいましては、かえって失礼になりましてござりまする。

早速当人にも相伝えまして、久しぶりで飛んだ喜ばせてやりま

した。全く御蔭様でござりまする。何が貴方、かねての心懸こころがけ

が宜よろしゅうござりまするので、私共もはや、特別に目を懸けまして、

他人のように思いませぬから、毎晩うな魘ふされまするのが、目も当てられませぬ、さればと申して、目を塞ふさいで寝ふまする訳には参りませずな、いやもう。」

と言懸うなけて、うなず、あたまと天窓あたまを搔かき、

「かような頭つむりを致つむりしまして、あてこともない、化物沙汰ざたを申上げまするばかりか、うわごと譚うわごと言うわごとの薬にもなりませんというは、誠まことに早はやもつての外でござりますが、自慢にも何にもなりません、しょうと生しょうと得く大の臆病おそで、引窓ひきまどがぱたりといつても箒ほうきが仆たおれても怖おっかな喫びつ驚り。

それに何と、いかに秋風が立つて、温泉場が寂れたと申しまし

ても、まあお聞き下さいまし。とんでもない奴等、若い者に爺じじ婆ば交りまじりで、泊とまりの三衛門さんゑもんが百万遍ひゃくまんべんを、どうでござりましょう、この湯治場へ持込みやがつて、今に聞いていらつしやい隣宿で始めますから、けたいが悪いじゃござせんか、この節あ每晚だ、五智ごちで海豚いづかが鳴いたつて、あんな不景気な声は出しますまい。

憑つきもの物のある病人に百万遍の景物じゃ、いやもう泣きたくありません。はははは、泣くより笑わらいとはこの事で、何に就けてもお客様に御迷惑な。」

「なあに、こつちの迷惑より、そういう御様子ではさぞ御当惑をなさるでありますよう、こう遣つて、お世話になるのも何かの御縁でしょうから、皆さん遠慮しないが宜しい。」

と二人で差向さしむかいで話をしておりまする内に、お喜代、お美津でありましよう、二人して夜具をいそいそと持運び、小宮山のと並べて、臥床ふしどを設けたのでありますが、客の前と気を着けましたか、使つてるものには立派過ぎた夜具、敷蒲団しきぶとん、畳んだまま裾すそへふつかりと一つ、それへ乗せました枕は、病人が始終黒髪を取乱しているのでありましよう、夜の具ものの清らかなるには似あかつず垢附あかつきまして、思おもいな做しか、涙の跡も見えたのであります。

お美津、お喜代は、枕りょうばたの両りょう傍ばたへちよいと屈かがんで、きゆうツまつすぐと真直まつすぐに引直し、小宮山に挨拶をして、廊下の外へ。

ここへ例の女の肩に手弱たおやかな片手を掛け、悩ましい体を、少より懸かり、下に浴衣、上へ繻子しゆすの襟かかの掛かつた、縞物しまものの、白おしろ

粉垢いあかに冷たそうなのを襲かさねて、寝衣ねまきのままの姿であります、幅はば狭せまの巻附帯、髪は櫛くしまき巻まきにしておりますが、さまで結ばれても見えませぬのは、客の前へ出るというので櫛の齒に女の優しい心を籠こめたものであります。年紀としの頃は十九か二十歳はたち、色は透とほる程白く、鼻筋の通りました、窶やつれても下しも脹ふくれな、見るからに風の障るさえ痛々しい、葛くずの葉のうらみがちなるその風情。

八

高きやみが氣病きやみと聞いたものが、思いの外のお雪の様子、小宮山はまあるじず哀れさが先立って、主と顔を見合せます。

介添の女はわざと浮いた風で、

「さあ御縁女様。」

と強く手を引いて扶たすけ入れたのであります。お雪はそんな中うちにも、極きまりが悪かったと見え、ぼんやり顔をば赧あからめまして、あわれ霜に悩む秋の葉は美しく、蒲団の傍そばへ坐りました。

「お雪さん、嬉しいでしょう。」

亭主までが嬉しそうに、莞爾にこにこ々々して、

「よくお礼を申上げな。」

と言うのであります。別わけて申上げますが、これから立女たておや役まがすべて女寅めとらが煩わづったという、優しい哀れな声で、ものを言うのであります。春葉君だと名代の良いい処を五六枚、上手に

使い分けまして、誠に好い都合でありますけれども、私の地声では、ちつとも情が写りますまい。その辺は大目に、いえ、お耳にお聞溢しききこぼを願ひまして、お雪は面映氣おもはゆげに、且つ優しおらしく手を支つかえ、

「難ありがと有う存じます、どうぞ、……」

とばかり、取とりすが継つぎるように申しました。小宮山は、亭主といい、女中の深切、お雪の風采とりなり、それやこれや胸一杯になりまして、思わずほろりと致しましたが、さりげのう、ただ領うなずいたのであります。

「そらお雪、どうせこうなりや御厄介だ。お時儀じぎも御挨拶も既に通り越しているんだからの、御遠慮を申さないで、早く寝かして

戴くと可い、寒いと悪かろう。俺おれでさえぞくぞくする、病人はな
 おの事こツた、お客様ももう御寝げしなりまし、お鉄や、それ。」「
 と急遽そそくさして、実は逃にげ構がまえも少々、この臆病者は、病人の名
 を聞いてさえ、悚然ぞつとする様子で、

お鉄こやつ（此奴こやつあ念を入れて名告なる程の事ではなかつた）は袖屏そでびよ
 風うふうで、病人を労いたわつていたのでありますが、

「さあさあ早くその中へ、お床は別々でも、お前さん何だよ御婚
 礼の晩は、女が先へ寝るものだよ、まあさ、御遠慮を申さないで、
 同じ東京のお方じゃないか、裏の山から見えるなんて、噂ばかり
 の日本橋のお話でも聞いて、ぐつと気をお引立てなさいなね。水
 道の水を召めし食あがッていらつしやれば、お色艶もそれ、お前さんの

あの方に、ねえ旦那。」

「まずの。」

と言ったばかりで、金蔵はまじりまじり。大方時刻の移るに従うて、百万遍を気にするのであります。お鉄は元氣好く含羞はにかむお雪を柔かに素直に寝かして、袖を叩き、裾をおき圧え、

「さあ、お客様。」

と言ったのであります。小宮山も人目のある前で枕を並べるのは、気が差してぼつ跋も悪うございますから、

「まあまあお前さん方。」

「さようならば、御免を蒙こうむります。伊賀越ごえでおいでなすつたお客じやないから、私わしがももひきむそ股引穢むそうても穿はいて寝るには及ばんわ、

のうお雪。」

「旦那笑談じょうだんではございませんよ、失礼な。お客様御免下さいまし。」

と二人は一所に挨拶をして、上段の間を出て行きます、親仁おやじは両提りようさげの蓑たばこいれ入いれをぶら提げながら、克明はげあたまに禿頭はげあたまをちやんと据えて、てくてくと敷居を越えて、廊下へ出逢頭であいがしら、わツと云う騒動さわぎ。

「痛え。」とあいたしこをした様子。

さつきから障子の外に、様子を窺うかがっておりましたものと見える、誰か女中の影に怯おびえたのであります。笑うやら、喚わめくやら、ばたばたという内に、お鉄が障子を閉めました。後の十畳敷ひっそは寂

然と致し、二筋の燈とうすみ心は二人の姿と、床の間の花と神農様の像を、朦朧もうろうと照てらしまする。

九

小宮山は所在無さ、やがて横になつて衾ふすまを肩に掛けましたが、お雪を見れば小さやかにふつかりと臥ふして、女雛めびなを綿わたに包んだようでありまする。もとより内気な女の、先方さきから声を懸かけようとは致しませぬ。小宮山は一晩介抱を引受けたのでありまするから、まず医者いしやの気になりますと物もいよい好よいのでありまするから、

「姉さん、さぞ心細こまいだろうね、お察し申す。」

「はい。」

「一体どんな心持なんだい。何でも悪い夢は、明かしてぱッぽと言うものだことわざと諺にも云うのだから、心配事は人に話をする方が、気が霽はれて、それが何より保養になるよ。」

としみじみいたわ勞いたわつて問い慰める、真心は通つたと見えまして、少し枕を寄せるようにして、小宮山の方を向いて、お雪は溜ため息いきを吐つきました、

「貴方は東京のお方でございますね。」

「うむ、東京だ、これでも江戸ッ兎こだよ。」

「あの、そう伺いますばかりでも、私は故郷の人に逢いましたよ、うで、お可懐なつかしいのでござりますよ。」

「東京が鼻^{ひいき}肩^{かた}かい、それは難^{ありがた}有^たいね、そしてここいらに、鼻^{ひいき}肩^{かた}は珍しいが、何か仔^{しさい}細^{さい}が有^ありそうだな。」

小宮山は、聞きませんでもその因^{いわれ}縁^縁を知^しつておりましよう、けれども、思うさま心の内を話^{はな}さして、とにかく慰^{なぐさ}めてやりたい心。「東京は大層^{おほい}広^{ひろ}いそうでございますから、泊^{とど}のものを、こちらで存^{ぞん}じておりますよ。な訳^{わけ}には参^{まゐ}りますまいけれども、あのう、私は篠^さ田^だ様^{さん}と云^いう、貴^{あなた}方^{かた}の御^{おと}所^{ところ}の方^{かた}に、少^{すこ}し知^{しり}己^あいがあるのをございます。」

小宮山は肚^{はら}の内^{うち}で、これだな……。。

「訳^{わけ}は申^ま上げる事^{こと}は出来^こません、そのお方^{あなた}の事^{こと}が始^{はじ}終^{しま}気^きに懸^かりまして、それがために、いつでも泣^ないたり笑^{わら}ったり、自分^{自分}でも解^と

りませんほど、気を揉もんでおりました。それがあの、病の原因もとな
んでございましたよ。

昼も夜もどつちで夢を見るのか解りませんような心持で、始終
ふらふら致しておりましたが、お薬も戴きましたけれども、復なおつ
てからどうという張合がありませんから、弱りますのは体ばかり、
日たが経ちますと起きてるのが大儀でなりませんので、どこが痛む
というでもなく、寝てばかりおりましたのでございますよ。」

さあ驕おごれ、手も無くそれは恋こい病わづらいだと、ここで言われた訳で
はありませんから、小宮山は人の意気事を畏かしこまって聞かされたの
であります、勿論容体を聞く気でありますから、お雪の方でも、
医者だと思つて遠慮がない。

「久しくそんなに致しております内、ちようどこの十日ばかり前の真夜中の事でございます。寐ねられません目をぱちぱちして、瞶みつめておりました壁の表へ、絵に描かいたように、茫ぼんやり然、可恐おそろしく脊の高い、お神さんの姿が顕あらわれまして、私が夢かと思つて、熟じつと瞶みつめております中、登うち音あしおともせず壁から抜け出して、枕まくらもと頭あたまへ立ちましたが、面長で険のある、鼻の高い、凄すこいほど好いい年増としまなんでございますよ。それが貴方、着物も顔も手足も、稲いなびかり光かりを浴びたように、蒼まっさお然はつきりで判然と見えました。」

「可訝おかしいね。」

「当あたりまえ然なら、あれとか、きやつとか声を立てますのでござい

ますが、どう致しましたのでございますか、別に怖いとも思いま

せんと、こう遣つて。」

と枕に顔を仰向あおむけて、清すずしい目を睜みはつて熟と瞳を据えました。

小宮山は悚然ぞっとする。

「そのお神さんが、不思議ではありませんか、ちゃんと私の名を存じておりました、

(お雪や、お前、あんまり可哀そうだから、私ながその病氣なを復なして上げる、一所においで。)

と立ったまま手を引くように致しましたが、いつの間にやら私の体は、あの壁を抜けて戸外おもてへ出まして、見覚みおぼえのある裏山の方へ、冷たい草原の上を、貴方、跣足はだしですたすた参るんでございます。」

「零余子^{むかご}などを取りに参ります処で、知っておりませんのでござい
 ますが、そんな家^{うち}はある筈^{はず}はございません、破家^{あばらや}が一軒、それ
 も茫然^{ぼんやり}して風が吹けば消えそうな、そこが住居^{すまい}なんでございま
 しょう。お神さんは私を引入れましたが、内に入りますと貴方ど
 うでございましょう、土間の上に台があつて、荒筵^{あらむしろ}を敷いて
 あるんでございますよ、そこらは一面に煤^{すす}ぼつて、土間も黴^{かび}が生
 えるように、じくじくして、隅の方に、お神さんと同じ色の真^{まっさ}
 蒼^おな灯^{あかり}が、ちよろちよろと点^{とも}れておりました。

(どうだ、お前ここにあるものを知ってるかい。)とお神さんは、

その筵の上にあるものを、指ゆびさしをして見せますので、私は恐々こわごわ覗のぞきますと、何だか厭いやな匂におのする、色々な雑物ぞうもつがございましたの。
 (これはの、皆人を磔はりつけに上げる時に結えた縄だ、) っしごて扱しごいて見せるのでございます。私はもう、気味が悪いやら怖いやら、がたがた顫ふるえておりますと、お神さんがね、貴方、ざくりと釘を掴つかみまして、

(この釘は丑うしの時とき参まいりが、猿丸の杉に打込んだので、呪のろいの念が鑄さびつ附ついているだろう、よくお見。これはね大工が家を造る時に、誤あやつて守宮やもりの胴の中へ打込んだものじゃ、それから難破した船の古釘、ここにあるのは女の抜髪とかけ、蜥蜴とかけの尾の切れた、ぴちぴち動いてるのを見なくちや可いけない。) と差附さけられました時は、も

のも言われません。

（お雪、私がこれを何にする、定めしお前は知っていよう。）どうして私が知っておりましょう。

（うむ、知ってる、知っている筈じゃないか、どうだ。）と責めるように申しますから、私はどうなる事でしょうと、可恐おそろしさのあまり、何にも存じませんと、自分にも聞えませんかくらい。

（何存ぜぬことがあるものか、これはな、お雪、お前の体に使うのだ、これでその病気を復なおしてやる。）と屹きつと睨にらんで言われましたから、私はもう舌が硬こわばってしまいましたのでございます。お神さんは落着き払みづって、何か身みづ繕くろいをしましたが、呪文のようなことを唱えて、その釘だの縄だのを、ばらばらと私の体へ投付け

ますじやありませんか。

はッと思ひますと、手も足も顫える事が出来なくなつたので、
 どうでございましょう、そのまま真直まっすぐに立つたのでございませ
 わ。

そう致しますとお神さんは、棚の上からまた一つの赤い色の鑷びん
 を出して、口を取つてまた呪文を唱えますとね、黒い煙が立登つ
 て、むらむらとそれが、あの土間の隅ひろへ寛ひろがります、とその中へ、
 おどろのような髪を乱して、目の血走つた、鼻とんがの尖つた、瘦やせッこ
 けた女が、俯うつむ向けなりになつて、ぬつくり顫あらわれたのでございませ
 よ。

(お雪や、これは嫉妬しつとで狂死くるいじにをした怨念おんねんだ。これをここへ

呼び出したのも外じやない、お前を復してやるその用に使うのだ。
)と申しましてね、お神さんは突いきなり然袖まくを捲まくつて、その怨念の
 胸の処へ手を当てて、ずうと突つっこ込んだ、思いますと、がばと口が
 開あいて、拳こぶしが中へ。」

と言懸こもけました、声に力は籠こもりましたけれども、体は一層力無
 げに、幾度も溜息を吐ついた、お雪の顔は蒼いざめて参ります。小

宮山は我を忘れて枕なを半なかば

「そのまま真ま白しろな肋あ骨ぼねを一筋、ほきりと折おつて抜取ひりまし
 てね。

(どうだ、手前てめえが嫉妬あで死しんだ時の苦くしみは、何とこのくらしいの
 ものだったかい。)と怨念あに向むいまして、お神さんがそう云いいま

すと、あの、その怨おんりよう霊れいがね、貴方あなた、上下うえしたの齒はを食くい緊しばつて、
 (ううむ、ううむ。)と二つばかり、合点々々を致したのでござ
 いますよ。

(可よし。)とお神さんが申しますと、怨念はまたさつきのような
 幅の広い煙となつて、それが段々罫の口へ入つてしまいました。

それからでございしますが。」

とお雪は打うち戦わなないて、しばらくは口も利けません様子。

十一

さてその時お雪が話しましたのでは、何でもその孤ひと家つやの不思

議くだんな女が、件の嫉妬で死んだ怨霊の胸をあば発いて抜取ったという肋あ
 骨ぼらほねを持って前ぜん申しまする通り、釘だの縄だのに、呪のろわれて、

動くこともありませんで、病み衰えておりますお雪を、手ともい
 わず、胸、肩、背ともいわず、びしびしと打ちのめして、

(さあどうだ、お前、男を思い切るか、それを思い切りさえすれ
 ば復なほる病氣じゃないか、どうだ、さあこれでも言う事を聞かない
 か、薬は利かないか。)

と責めますのだそうであります、その苦しさが耐えられませ
 ぬ処ところから、

(御免なさいまし、御免なさいまし、思い切ります。)

と息の下で詫びます。それでは帰してやると言う、お雪はい

つの間にか旧もとの閨ねやに帰っております。翌あくるばん晩ばんになるとまた昨夜ゆうべ

のように、同じ女が来て手を取つて引出して、かの孤家へ連れて

まいり、釘だ、縄だ、抜髪だ、蜥蜴とかげの尾だわ、肋あばらぼね骨ほねだわ、同

じ事を繰返して、骨身に応こたえよと打ちやうちやく擲ちやくする。

(お前、可い加減な事を言つて、ちつとも思い切る様子はないで

はないか。さあ、思い切れ、思い切ると判はつきり然し言え、これでも薬

はまだ利かぬか。)

と言うのだそうでありますな。

申すまでもありません、お雪はとても辛抱の出来る事ではない

のですから、きつと思ひ切ると言う。

それではと云つて帰します。

翌あくるばん 晩ばんも、また翌晩も、連夜まいよの事できつと時刻を違たがえず、その緑青で鑄い出しただような、蒼い女が遣たつて参り、例の孤家へ連れ出すのだそうでありますが、口くちさき頭あたまばかりで思い切らない、不埒ふちちな奴、引摺ひきずりな阿魔めと、果はては憤いりを発して打ち打擲うちうちを続けるのだそうでございます。

お雪はこれを口にするさえ耐えられない風情に見えました。

「貴方、どうして思い切れませぬのでございましょう。私は余り折せつかん檻かんが辛うございませぬから、確たしかに思い切りますと言うんですけれども、またその翌あくるばん 晩ばん 同じ事を言つて苦しめられます時、自分でも、成程と心付きますが、本当は思い切れないのでございませぬよ。

どうしてこれが思い切れましょう、因縁とでも申しますのか、
どう考え直しましても、叱つてみても宥なだめてみても、自分が自由
にならないのでございますから、大方今に責め殺されてしまいま
しょう。」

と云う、顔の窶やつれ、手足の細り、たゆげな息使い、小宮山の目
にも、秋の蝶の日に当たったら消えそうに見えまして、

「死ぬのはちつとも厭いといませぬけれども、晩にまた酷ひどい目に逢う
のかと、毎日々々それを待っているのが辛くつてなりません。貴
方お察し遊ばして。」

本当に慾よくも未来も忘れましてどうぞまあ一晩安々ね寐ねて、そうし
て死にますれば、思い置く事はないと存じながら、それさえ自由まま

になりません、余りといえは悔しゆうございましたのに、こうや
 ってお傍そばに置いて下さいましたから、いつにのう胸の動悸どうきも鎮り
 まして、こんな嬉しい事はございませぬ。まあさぞお草臥くたびれなさい
 まして、お眠うもございましょうし、お可煩うるそうございましょうの
 に、つい御言葉に甘えまして、飛んだ失礼を致しました。」

人にも言わぬ積り積った苦勞を、どんなに胸たくわに蓄えておりまし
 たか、その容体ではなかなか一通りではなからうと思う一部始終
 を、悉くわしく申したのであります。

さつきから黙然もくねんとして、ただ打領うちうなずいておりました小宮山
 は、何と思いましたか力強く、あたかも虎てうちを搏つかにするがごとき意
 気込で、蒲団の端を景気よくとんと打って、むくむくと身を起し、

さも勇ましい顔で、莞爾にっこりと笑いまして、

「訳はない。姉さん、何の事こつたな。」

十二

「皆みんなそりや熱のせいだ、熱だよ。姉さんも知ってるだろうが、熱じゃ色々な事を見るものさ。疫えやみの神だの疱瘡ほうそうの神だのと、よく言うじゃないか、みんなこれは病人がその熱の形を見るんだつさ。

なかにも、これはちいと私が知己ちかづきの者の維新前後の話だけでも、一人、踊で奉公をして、下谷辺したやのあるお大名の奥で、お小姓を勤めたのがね、ある晩お相手から下つて、部屋へ、平生ふだんより

は夜が更けていたんだから、早速お勤つとめの衣裳いしやうを脱いでちやんと伸のして、こりや女の嗜たしなみだ、姉さんなんでも遣るだろうじやないか。
 「」

「はい。」

「まあお聞きそれから縞しまのお召縮緬めしちりめん、裏に紫縮緬むらさきしりめんの附いた寝衣ねまきだったそうだ、そいつを着て、紅梅べんぎの扱帯しごきをしめて、蒲団ふとんの上で片膝かたひざを立てると、お前、後毛おくれげを搔かき上げて、懐紙わくしで白粉おしろいをあつちこつち、拭ふいて取る内に、唇くちびるに障さわるとちよいと紅べにが附べいたろう。お小姓おこせうがね、皺しわを伸ししてその白粉おしろいの着いた懐紙わくしを見ていたが、何と思つたか、高島田たかしまだに挿さしている銀ぎんの平打ひらうちの簪かんざし、※が附べいている、これは助高屋すけたかやとなつた、沢村さわむら訥とつしやう升しやうの紋もんなんで、それをこの

お小姓が、大層鼻^{ひいき}にしたんだつき。簪をぐいと抜いてちよいと見るとね、莞爾^{にっこり}笑いながら、そら今口紅の附いた懐紙にぐるぐると巻いて、と戴^{いた}いたとまあお思い。

可^ひいかい、それを文庫へ了^{しま}つて、さあ寝支度も出来た、行燈^{あんどう}の灯^ひを雪洞^{ぼんぼり}に移して、こいつを持つとすツと立って、絹の鼻緒^{すか}の嵌^かつた層ね草履をばたばた、引摺^かつて、派手な女だから、まあ長襦袢^{ながじゆばん}なんかちちちとしたろうよ。

長廊下を伝つて便所へ行^ゆくものだ。矢だの、鉄砲だの、それ大袈裟^{おげさ}な帯が入るのだから、便所は大きい、広い事、畳で二畳位は敷けるのだと云うよ。それへ入ろうとする^よとね、えへん！ ともいわず歌も詠^よまないが、中に人のいるような氣勢^{けはい}がするから、ふ

と立停たちどまった、しばらく待ってても、一向に出て来ない、氣を鎮めてよく考えると、なあに、何も入っていはしないようだったつさ。

ええ、姐ねえさん変じやないか、氣が差すだろう。それからそのお小姓は、雪洞を置いて、ぼたりと戸を開けたんだ、途端に、大変なもの、お前心持を悪くしては可いけない、これがみんな病のせいだ。

戸を開けると一所に、中まに真俯まうつむ向けになつていた、穢きたない婆ばあが、何とも云いようのない顔を上げて、じろりと見た、その白髪しろがというものが一通りではない、銀の針金すずきのようなのが、薄すすきを一束刈つたように、ざらざらと逆様に立つた。お小姓はそれツきり。

さあ、お奥では大騒動、可恐しい大熱だから伝染ても悪し、本人も心許ないと云うので、親許へ下げたのだ。医者はね、お前、手を放してしまつたけれども、これは日ならず復つたよ。

我に反るようになってから、その娘の言うのには、現の中ながらどうかして病が復したいと、かねて信心をする湯島の天神様へ日参をした、その最初の日から、自分が上がるという、あの男坂の中程に廁で見た穢ない婆が、掴み付きそうにして控えているので、悄然と引返す。翌日行くとまた居やがる。行つちや帰り、行つちや帰り、ちようど二十日の間、三七二十一日目の朝、念が届いてお宮の鰐口に縫りさえすれば、命の綱は繋げるんだけれども、婆に邪魔をされてこの坂が登れないでは、所詮こりや

扶たすからない、ええ悔しいな、たとえ途中で取殺されるまでも、お参まいりをせずおに措くものかと、切歯はがみをして、下じめをしつかりとしめ直し、雪駄せったを脱いですたすたと登り掛けた。

遮おそろつていた婆は、今娘の登つて来るのを、可恐しい顔で睨にらめ附けたが、ひよろひよると搦つかまつて、冷い手で咽のどをしめた、あれと、言つたけれども、もう手足は利かず、講談でもよく言うがね、既に危あやうきそこへ。」

十三

「上かみの鳥居の際へ一人出て来たのが、これを見るとつかつかと下

りた、黒縮緬三ツ紋の羽織、せんだいひら仙台平の袴、はかま黒羽二重の紋附を着
 て宗十郎ずきん頭巾を冠り、かぶ金銀を鏤めた大小、雪駄穿、ばき白足袋で、色
 の白い好い男の、年若な武士で、大小などは旭ひにきらきらして、
 その立派さといったらなかつたそうだよ。石段の上の方から、ず
 っと寄つて、

(推参な、婆あ見苦しい。)と言いさま、お前、疫病神の襟首を
 取つて、坂の下へずでんどうと逆様に投げ飛ばした、可い心持じ
 やないか。お小姓の難有ありがたさ、神とも仏ともただもう手を合せて、
 その武士を伏拝んだと思うと、我に返つたという。

それから熱が醒さめて、あの濡紙を剥はぐように、全快をしたんだ
 がね、病気の品に依つては随分そういう事が有勝ありがちのもの。

お前の女に責められるのも、今の話と同じそれは神経というものなんだから、しつかりして気を確たしかに持つて御覧、大丈夫だ、きつとそんなものが連れ出しに来るなんて事はありやしない。何も私が学者ぶつて、お前さんがそれまでに判然した事を言うんだもの、嘘だの、馬鹿々々しいなどは決して思うんじやないよ。可いかい、姐さん、どうだ、解つたかね。」

と小宮山は且つ慰め、且つ諭したのであります、そう致しますと、その物語の調子も良く、取つた譬たとえも腑ふに落ちましたものと、見えて、

「さようでございますかね。」

と申した事は纔わずかながら、よく心も鎮つて、体も落着いたよう

ありまする。

「そうとも、全くだ。大丈夫だよ、なあにそんなに気に懸ける事はない、ほんのちよいと気を取直すばかりで、そんな可怪あやしいものは西の海へさらりださ。」

「はい、難ありがと有う存じます、あのう、お蔭様で安心を致しましたせいか、少々眠くなつて参つたようでございますわ。」

と言にくい難そうに申しました。

「さあさあ、寐ねるが可い、寐るが可い。何でも気を休めるが一番だよ、今夜は附いているから安心をおし。」

「はい。」

と言つてお雪は深く頷うなずきました、静しずかに枕まくらを向へ返して、しば

らくはものも言わないでおりましたが、また密そつと小宮山の方へ向き直り、

「あのう、壁の方を向いておりますと、やはりあすこから抜け出して来ますようで、怖くつてなりませんから、どうぞお顔の方に向かしておいて下さいましな。」

「うむ、可いとも。」

「でございますけれども……。」

「どうした。」

「あのう、極きまりが悪うございますよ。」

とほんのり瞼まぶたを染めながら、目を塞ふさいでしかも頼母たのもしそう、力としまするよう、小宮山の胸で顔を隠すように横顔を見せ、床を

隔てながら櫛卷の頭つむりを下げ、口の上辺あたりまで衾ふすまの襟を引寄せましたが、やがてすやすやと寐入ったのであります。

その時の様子は、どんなにか嬉しそうであつた——と、今でも小宮山が申します。さて小宮山は、勿論寐られる訳ではありません。せぬから、しばらくお雪の様子を見ていたのであります。やや初夜過すぎとなりました。

山中の湯泉宿ゆやどは、寂然しんぜんとして静しずまり返り、遠くの方でざらりざらりと、湯女ゆなが湯殿を洗いながら、歌を唄うのが聞えます。

この界隈かいわい近国の芸妓げいしやなどに、ただこの湯女歌ばかりで呼びものになつていゝのがありますくらい。怠けたような、淋しいよ
うな、そうかというど冴えた調子で、間あいを長く引張ひっぱつて唄います

るが、これを聞くと何となく睡眠剤を服のまされるような心持で、

桂かつらしみず清水で手てぬぐい拭拾いた、
これも小川の温泉ゆの流れ。

などという、いわんや巖いわに滴いるのか、湯槽ゆぶねへ落つるのか、湯気
の凝あったのか、湯女歌の相間あいま々々に、ぱちやんぱちやんと響きま
するにおいてをや。

十四

これへ何と、前まえふれ触れのあつた百万遍まへんべんを持込みましたらうではあ
りませんか、座中の紳士貴婦人方、都育ちのお方にはお覚えはな
いのでありますが、三太やあい、迷まいイご児ごの迷まいイご児ごの三太やあい

と、鉦かねを叩いて山の裾を廻る声だの、百万遍の念仏などは余り結構なものではありませんな。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ……南無阿弥陀……南無阿弥陀。

亭主はさぞ勝手に天窓あたまから夜具をすつぽりであろうと、心に可笑しく思いますが、小宮山は山気膚はだに染み渡り、小用こようが達たしたくになりました。

折角可い心地で寐ねているものを起しては気の毒だ。勇士は轡くつわの音に目を覚ますとか、美人が衾ふすまの音に起きませぬよう、そつと抜出して用達しをしてまいり、往ゆきかえり復へ何事もなかつたのでありまするが、廊下の一方、今小宮山が行つた反対の隅の方で、柱が三つばかり見えて、それに一つ一つ掛けてあります薄暗い洋燈ランプの間

を縫って、ひらひらと目に遮った、不思議な影がありました。それが天井の一尺ばかり下を見え隠れに飛びますから、小宮山は驚いて、入り掛けた座敷の障子を開けもやらず、はてな、人魂ひとたまにしては色が黒いと、思いまする間も置かせず、飛ぶものは風を煽あおって、小宮山が座敷の障子へ、ばたりと留とまった。これは、これは、全くおいでなすったか知らんと、屹きつと見まする、黒い人魂に羽が生えて、耳が出来た、明あきらかに認めましたのは、ちよいと鳶とびくらいはあろうという、大きな蝙蝠こうもりであります。

そいつが羽撃はばたきをして、ぐるりぐるりと障子に打附ぶつつかって這は廻る様子、その動くに従うて、部屋の中の燈火ともしびが、明あかるくなり暗くなるのも、思いなし心持のせいでありましようか。

さては随筆に飛驒ひだ、信州などの山近な片田舎に、宿を借る旅人
 が、病もなく一晚の内に息の根が止とまる事がしばしば有る、それは
 方言飛縁魔ひのえんまと称となえ、蝙蝠とに似た嘴くちばしの尖とんがつた異形なものが、長襦
 袢しんぎを着て扱まつを纏まとい、旅人の目には妖艶あでやかな女と見えて、寝てい
 るものの懐いへ入り、嘴を開けると、上う下えで、口、鼻を蔽おほい、寐
 息を吸つて吸殺すがためだとございます。あらぬか、それか、
 何にしても妙ではない、かようなものを間の内へ入れてはならず
 と、小宮山は思案をしながら、片隅を五寸か一尺、開けるが早い
 か飛込んで、くるりと廻つて、ぴしやりと閉め、合せ目を押え附
 けて、どっこいと踏張ふんばつたのであります。しばらく、しつかり
 と押え附けて、様子を窺うかがつておりましたが、それきり物音もしま

せぬので、まず可よかつたと息を吐つき、これから静しずかに衾かの方を向き
 ますると、あにはからんやその蝙蝠みはは座敷の中をふわりふわり。
 南無なむ三宝さんぼうと呆氣あつけに取られて、目を睜みつた鼻はつ先を、件くだんの蝙蝠は
 横よこ撫なでに一つ、ばさりと当てて向むへ飛こんだ。

何様猫が冷たい処をこすられた時は、小宮山がその時の心持で
 ありましよう。

嚏くしゃみもならず、苦り切つて衝つ立つつておりますると、蝙蝠は翼を返
 して、斜ななめに低ななめう夜着とじいの綴いと糸いとも震とうばかり、何も知らないですや
 すやと寐ぐている、お雪の寝姿の周圍ぐるりをば、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐる
 りと三度。縫ぬつて廻まわられるたびに、ううむ、ううむ、うむと幽かすかに
 呻うめいたと、見るが否いなや、萎しおれ伏ふしたる女郎花おみなえしが、無むざん慙ざんや風かぜに吹

き乱されて、お雪はむツくと起上りましたのであります。小宮山は論が無い、我を忘れて後にしりえどうと坐りました。

蝙蝠はひるがえ翻つて、向側の障子の隙間から、ひらひらと出たと思うと、お雪が後につ跟いてずつと。

蚊帳を出いでてまだ障子あり夏の月、雨戸を開けるでもなく、ただ風の入るばかりの隙間から、体がすつと細くなり、水に映うつる柳の蔭の隠れたように、ふと外へ出て見えなくなりましたと申しますな。勿論、蝙蝠に引出されたんで。

小宮山は切齒はがみをなして、我あかがし赤檜を割つて八角に削りなし、鉄
 の輪十六を嵌はめたる棒を携え、彦四郎定宗ひこしろうさだむねの刀を帯びず、三池
 の伝太光世みつよが差添さしぞえを前半まえはんに手挟たばさまずといえども、男子だ、し
 かも江戸ツ見だ、一旦請合つた女をむざむざ魔に取られてなるも
 のかと、追駈おつかけざまに足踏をしたのであります。あいにく神通
 がないので、これは当あたりまえ然なに障子を開け、また雨戸を開けて、
 縁側から庭へ寝衣ねまき姿、跣足はだしのまままで飛下りる。
おもて戸外は真昼のような良い月夜、虫の飛び交うさえ見えるくらい、
おいしげ生茂なむった草が一筋に靡いて、白玉の露の散る中を、一文字に駈
 けて行くお雪の姿、早や小さくなって見えまする。

小宮山は蝙蝠のごとく手を拡げて、遠くから組んでも留めんず

勢いきおい。

「おうい、おうい、お雪さん、お雪さん、お雪さん。」

と声を限り、これや串じょうだん戯わをしては可いけないぜと、思ひわず独ひ

とりごと

言ことを言いながら、露草つみを踏ふしだき、薄すすきを搔かきわ分け、刈かる萱かやを押お

遣いつて、章駄いだてん天てんのように追お駈かけまする、姿すがたは草くさの中なかに見みえ隠かくれて、

あたかもこれ月夜つきよに兔うさぎの踊おどるよう。

「お雪さん、おうい、お雪さん。」

ああわい

間まもやや近ちかくなり、声こゑも届ときましたか、お雪ゆきはふと歩あゆみを停とどめて、

後あとを振返かえると両ふたの手てを合あせました。助たすけてくれと云いうのであろう、

哀あはれさも、不ふ便びんさもかばかりなるは、と駈かけ着きける中うち、操あやつりの糸いとに

掛かけられたよう、お雪ゆきは、左ひだりへ右みぎへ蹠よろ蹠よろして、しなやかな姿すがたを

揉み、しばらく争っているようでありました。けれども、また、
さつ颯と駈け出して、あわやという中うちに影も形も見失ったのでありま
 する。

処へ、かの魚津の沖の名物としてあります、しんきろう蜃気楼の中の
 小屋のようなのが一軒、月夜ともしに灯も見えず、前途もうろうに朦朧として
 顕あらわれました。

小宮山は三蔵法師を攫さらわれた悟空という格で、きよろきよろと
あたり四辺をみまわしておりましたが、頂は遠く、あたり四辺は曠野こうや、たとえ蝙蝠
 の翼に乗っても、虚空へ飛び上る法ではあるまい、またたき瞬一つしきら
うちぬ中、お雪の姿を隠したは、この家の内に相違ないぞ、こやつ這奴！
しょうせんざん小川山の妖怪ござんなれと、右から左へ、左から右へ取つて

返して、小宮山はこの家の周囲まわりをぐるぐると廻うかがつて窺うかがいましたが、あえて要害を見るには当らぬ。何の蝸牛でむしみたような住居すまいだ、この中に踏み込んで、罷まかり違えば、殻かを背負しよつても逃げられると、高くを括くつて度胸が坐つたのでありますから、威勢よく突つ立たつて凜りん々とした大音声。

「お頼み申す、お頼み申す！ お頼み申す!!」

と続けざまに声を懸けたが、内しんは森しんとして応こたえがない、耳を澄すますと物音もしないで、かえつて遠くの方で、化かけた蛙かわずが固かまつて鳴くように、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。と百万遍。眉ひそを顰ひそめた小宮山は、癩しやくに障さるから苛いらだ立たつて喚わめいたり。

「お頼み申す。」

すると、どうぞでございましょう、鼻ツ先の板戸が音もしないで、すらりと開く。

「騒々しいじゃないかね。」

顔を出したのが、鼻の尖とがった、目の鋭い、可恐おそろしく丈せの高い、蒼い色の衣服きものを着た。凄すごい年増としま。一目見ても見紛う処はない、お雪が話したそれなんで。

小宮山は思わず退すった、女はその我にもあらぬ小宮山の天窓あたまから足の爪つま先さきまで、じろりと見て、片頬かたほ笑わらいをしたから可恐おそろしいや。

「おや、おいでなさい、柏屋のお客だね。」

言語道断、先を越^{せん}されて小宮山はとぼんと致し、

「へい。」と言つて、目をぱちくりするばかりであります。

「まあ、御苦勞様だったね。さつきから来るだろうと思つて、どんなに待つていたか知れないよ。さあまあこつちへお上りなさい、少し用があるから。」

と言つた、文句が氣に入らないね、用があるなんざ容易でなさそう。

十六

相手は女だ、城は蝸^{でむし}牛、何程の事やある、どうとも勝手にし

やがれと、小宮山は唐突だしぬかれて、度胆どぎもを掴つかまれたのでありますから、少々捨鉢すてはちの気味きみこれあり、臆おくせず後に続くと、割合に広々とした一間へ通す。燈火ともしびはありませんが暗いような明るいような、畳の数もよく見える、一体その明あかりがというと、女が身に纏まとつていゝる、その真ま蒼つさな色の着物はだえから膚はだを通して、四辺あたりに射さ拡ひろがるように思われるのであります。

「ちよいと託ことづける事があるのだから、折角見えたものを情すげなく追し帰すのも、お気の毒だと思つて、通して上げましたがね、熟じつとして待つていなさい。私の方に支度があるのだから、お前さんまた大きな声を出したり、威張おごつたり、お騒さわぎだと為ためになりませんよ

。

と頭から呑んでかかつて、そのままどこかへ、ずい。

呑まれた小宮山は、怪しい女の胃袋の中で消化こなれたように、蹲つくばつてそれへ。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、
風が引いたり寄せたりして聞えまする、百万遍。

忌いまいま々いまいましいなあ、道中じや弥次郎兵衛もこれに弱やつたつけ、耐たま

つたものではないと、密そつと四辺あたりをみまわしますると、塵ちり一ツ葉はも目を

遮くわらぬこの間の内に床が一つ、草を銜くわえた神農様の像が一軸かか懸かつ

ておりまするので、小宮山は訳が解らず、何でもこれは気を落着
けるにしく事なしだと、下ツ腹へ力を入れて控えておりまする。

またしても百万遍。小宮山はそれを聞くと悪寒がするくらい、聞

くまい、聞くまいとする耳へ、ひいひい女の泣声が入りました。屹きつとなつて、さあ始めやがった、あん畜生、また肋あばらの骨で遣つてゐるな、このままじゃ居られないと、突立つたちました小宮山は、早く既にお雪が話の内の一員に、化しおおしたのであります。

その場へ踏み込みたす扶けてくりようと、いきなり隔へだての襖ふすまを開けて、次の間へ飛込むと、広さも、様子も同じような部屋、また同じような襖がある。引開けると何もなく、やつぱり六畳ばかりの、広さも、様子も、また襖がある。がたりと開ける、何もなくて少しも違わない部屋であります。

阿房宮より可恐おそろしく広いやと小宮山は顛倒てんとうして、手当り次第に開けた開けた。幾度遣つても笥たかんの皮なを剥むくに異ならずであります。

するから、呆れ果ててどうと尻餅、茫然ほんやりあたり四辺をみまわしますると、神農様の画像を掛けた、さつき女が通したのと同じ部屋へ、おやおやおや。また南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と耳に入ると、今度は小宮山も釣込まれて、思わず南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

その時すらりと襖を開け、

「誰方どなただい、今お騒さわぎなすつたのは。」

「へい。」といった、後はもうお念仏になりそうな、小宮山は恐る恐る、女の微笑ほほえんでおります顔を見て、どうかこうか、まあ殺されずに済みそうだと、思うばかりでございします。

「一体物ものずき好ずきでこんな所へ入つて来たお前さんは、怖いものが見たいのだろう。少々ばかりね。」

「いえ、何。」と口の内。

「まあ、おいでなさい。」

わらわ

妾わらわに跟ついてこつちへと、宣のりしめ示すがごとく大様に申して、肅然

と立たつて導ずきますから、詮せんかた方なしに跟ついて行く。土間くびすが冷ひやく踵すね

に障さつたと申ましますると、早はや或小宮山の顔そうぜん色蒼然ぜん！

話わに聴きいた、青あお色のその燈とも火しび、その台たい、その荒あらかむ筵しん、その

あたり四辺よへの物ものの氣勢けいせい。

お雪ゆきは台むこうの向むかへしどけなく、崩くず折おれて仆たおれていたののであります

る。女おんなは台たいの一方ひとへへ、この形かたなしの江戸えどッ児こを差さ置おいて、一方ひとへ

お雪ゆきを仆たおした真まんなか中なかへぬつくと立たち、袖そでみじか短たな着物まっしろの真ま白しろな

腕うでを、筵しんの上うへへ長ながく差さし伸のびして、ざざくりと釘つかみを一ひと搦なみ。

「どうだね、お客様。」

「どう致しまして。」

小宮山は慇懃いんぎんに辞退をいたしまする。

十七

「これを知っていないさるかえ。」

と二の腕を曲げて、件くだんの釘を乳の辺もたらへ齎てして、掌てのひらを拵たげて据えた。

「どう致しまして。」

「知らない？」

「いえ、何、存じております。」

「それじゃこれは。」

「へい。」

「女の脱ぬけがみ髪。」

小宮山は慌あわただしく、

「どう致しまして。」

「それじゃ御覧。」

と撮つまんで宙で下げたから、そそげた黒髪がさらさらと動きま
した。

「いえ、何、存じております。」

「これは。」

「存じております。」

「それから。」

「存じております。」

「それでは、何の用に立つんだか、使い方を知っているのかえ。」
うっかり迂濶おそろ知らないなぞと言おうものなら、使い方を見せようと、

この可恐おそろしい魔法の道具を振廻すばやされては大変と、小宮山は逸早く、
 「ええ、もう存じておりますとも。」

と一際念入りに答えたのであります。言葉尻も終らぬ中、うち繩
 も釘もはらはらと振りかかった、小宮山はあツとばかり。

ちよいと皆様に申上げますが、ここでどうぞ貴方がたがあツ
おっしゃと仰有った時の、手附、かおつき顔色に体の工合ぐあいをお考えなすつて下

さいまし。小宮山は結局つまり、あつと言った手、足、顔、そのまま、指の尖さきも動かなくなったのであります。

「よく御存じでございましたね。」

と嘲ちやうろう弄ろうするごとく、わざと丁寧ていねいに申しながら、尻目に懸け

てにたりとして、向むへ廻り、お雪の肩へその白い手を掛けました。

畜生！ 飛附たすいて扶たすけようと思つたが、動けるどころの沙汰で

はないので、人はかような苦しい場合にも自ら馬鹿々々しい滑稽の趣味を解するのであります、小宮山はあまりの事に噴ふきだ出して、我と我身を打笑い、

「小宮山何というざまだ、まるでこりや木戸銭は見てのお戻りという風だ、東西、」

と肚はらの内。

女はお雪の肩を揺動ゆりうごかしましたが、何とも不思議な凄すごい声で、

「雪や、苦しいか。」

お雪はいとど俯向うつむいていた顔を、がっくりと俯向うつむけました。

「うむ、もう可い、今夜は酷ひどい目に逢あわしやしないから、心配をする事はないんだよ。これまで手を変え、品を変え、色々にしてみたが、どうしてもお前は思い切らない、何思い切れないのだな、それならそれで可いようにして上げようから。」

と言聞かしながら、小宮山の方を振向いたのであります。

「お客様、お前は性しょうわる悪わるだよ、この子がそれがためにこの通りの苦勞くろうをしている、篠田と云う人と懇意こんいなのじゃないか、それだ

のにき、道中荷が重くなると思つて、託ことづけも聞こうとはせず、知らん顔をして聞いていたろう。」

と鋭い目で熟じつと見られた時は、天窓あたまから、悚然ぞつとして、安本亀かめはち八作、小宮山良助アツと云う体ていにござりまする活人形いきにんぎようへ、氷あびを浴あびせたようになりました。

「その換りかわ少しばかり、重い荷を背負しよわして上げるから、大事にして東京まで持つて行きなさい。託ことづけというのはそれなんだがね、お雪はとてたすかも扶たすからないのだから、私も今まで乗のり懸かつた舟で、この娘の魂をお前さんにおんぶをさして上げるからね、密そつと篠田の処まで持つて行くのだよ。さぞまあお邪魔でございませうねえ

。」

十八

小宮山がその形で突立つたまま、口も利けないのに、女は好事をほざいたのであります。

それから女は身に纏つた、その一重の衣を脱ぎ捨てまして、糸も掛けざる裸体になりました。小宮山は負惜、此奴温泉場の化物だけに裸体だなど思っておりません。女はまた一つの青色の纏を取りましたから、これから怨念が顕れるのだと恐を懐くと、かねて聞いたとは様子が違い、これは掌へ三滴ばかり仙女香を使う塩梅に、両の掌でぴたぴたと揉んで、肩から腕へ

塗り付け、胸から腹へ塗り下げ、襟耳の裏、やがては太股、脹くらはぎ脛、足の爪先まで、隈くまなく塗り廻しますると、真直まっすぐに立上りましたのであります。

小宮山は肚はらの内うちで、

「東西。」

女はそう致して、的まとも面に台に向いまして、ちちんぷいぷい、御ご代よの御おん宝たからと言ったのだか何だか解りませぬが、口に怪しい呪文を唱えて、ばさりばさりと双ふたつかいなの腕うでを、左右まっすぐへ真直まっすぐに伸のしたのを上うえ下したに動かししました。体がぶるぶるツと顫ふるえたと見るが早いか、搔消かきけすごとく裸身はだかみの女は消えて、一羽の大蝙蝠となりましてございます。

例のごとくふわふわと兩三度土間の隅々を縫いましたが、いきなり俯うつむけになつているお雪の顔へ、顔を押当て、翼でその細い項うなじを抱いて、仰あおむ向けくちばしに嘴くちばしでお雪の口をおさえまして、すう、すうと息を吸うのであります。

これを見せられた小宮山は、はツと思つて息を引いたが、いかんともする事かな叶かなわず、依然としてそのあツと云う体てい。

二度三度、五度六度、やや有つて息を吸取つたと見えましたがお雪の体は死んだもののようになつてはたと横たお様にたお仆たおれてしまひました。

喫びっくり驚びっくり仰天はこれのみならず、蝙蝠がすツと来て小宮山の懐へ、ふわりと入いりましたので、再びあツと云つて飛び上ると同時に、

心付きましたのは、旧もとの柏屋の座敷に寝ていたのであります。

大息といきを吐ついて、蒲団の上へ起上った、小宮山は、自分の体か、

人のものか、よくは解らず、何となく後見うしろらるるような気がする

ので、振返つて見ますると、障子が一枚、その外に雨戸が一枚、

明らさまに開あいて月が射さし、露なり、草なり、野も、山も、渺びよう

々びようとして、鶏とり、犬の声も聞えませぬ。何よりもまず氣遣わしい、

お雪はと思う傍そばに、今息を吸取られて仆たおれたと同じ形になつて、

生しやうじ死は知らず、姿ばかりはありました。

小宮山は冷たい汗が流れるばかり、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、と隣で操り進む百万遍の声。

「姐ねえさん、姐さん、」

小声で呼んでみたが返事がないので、もしやともう耐^{たま}らず、夜具の上から揺^ゆ振り^{すぶ}りました。

「お雪さん。」

三声ばかり呼ぶと、細く目を開いて小宮山の顔を見るが否や、さもさも物に恐れた様子で、飛着くように、小宮山の帯に縋^{すが}り、身を引^ひ緊^きめるようにして、坐った膝に突^つ伏^つします。戦^{おの}く背中を小宮山はしつかと抱^{いだ}いた、様子は見届けたのでありますから、哀れさもまた百倍。

怖さは小宮山も同じ事、お雪の背中へ額を着けて、夜の明くるのをただ、一刻千秋^{おも}の思^いで待構えまする内に疲れたせい^まいか、我にもあらずそろそろと睡^まみ^どろしましたと見えて、目が覚めると、月の夜^よ

は変り、山の端はに晴々あさひしい旭、草木の露は金こんじき色ちりばを鏤ちりばめておりま
した。

密そつと膝こから下すと、お雪はやはりそのままに、すやすやと寐ね入い
っている。

「お早うございます。」

と声を懸けて、機嫌きげん聞ききに亭主ていしゅが真ま先さき、百万遍まひゃんべんさえ止やみま
すれば、この親仁おやし大元だいげん気で、やがてお鉄てつも参まり、

「お客様お早うございます。」

小宮山は早速うが嗽手いちようず 水を致して心持もさっぱりしましたが、右左から亭主、女共が問い懸けまする昨晚の様子はいや、ただお雪がちよいとうな魘うなされたばかりだと言つて、仔細しさいは明しませんでございました、これは後の事のちを慮きづかつて、皆が恐れげなくお雪の介抱をしてやる事が出来るようにと、氣を着けたのであります。

お雪の病氣を復なおすにも怪しいものを退治るにも、耆婆きはへんじやく扁鵲へんじやくに及ばず、宮本武蔵、岩見重太郎にも及ばず、ただ篠田の心一つであると悟りましたので、まだ、二日三日も居て介抱もしてやりたかつたのではありますけれども、小宮山は自分の力では及ばない事を知り、何よりもまず篠田に逢つてと、こう存じましたので、急がぬ旅ながら早速出立を致しました。

その柏屋を立ちまする時も、お雪はまだ昨夜ゆうべのまま寝ていたの
であります。失礼な起ししようと口々に騒ぐを制して、朝餉あさげ
も別間において認めしたた、お前さん方が何も恐こわがる程の事はないのだ
から、大勢側に附いて看病をしておやんなさいと、暮々も申し残
して後髪を引かれながら。

その日、糸魚川から汽船に乗つて、直江津に着きました晩、小
宮山は夷屋えびすやと云う本町の旅籠屋に泊りました、宵の口は何事も
無かったのでありまするが、真夜中にふと同じ衾しとねにお雪の寝てい
るのを、歴々ありありと見ましたので、喫驚びつくりする途端に、寝姿むこうが向む
きになったその櫛卷くしまきが溢こぼれて、畳の上へざらりという音。

枕に着かるるどころではありませぬ、ああ越中と越後と国は変

つても、女の念は離れぬかとまさかに魂を託つたとまでは、信じなかつたのでありますけれども、つくづく溜息をしたのであります。

夜が明けると、一番の上り汽車、これが碓氷の隧道を越えま
す時、その幾つ目であつたそうで。

小宮山は何心なく顔を出して、真暗な道の様子を透している
と、山清水の滴る隧道の腹へ、汽車の室内の灯で、その顔が映つ
たのであります、と並んで女の顔が映りました。確かにそれがお
雪の面影。

それぎり何事もなく、汽車は川中島を越え、浅間の煙を望み、
次第に武蔵の平原に近づきます。

上野に着いたのは午後の九時半、都に秋風の立つはじめ、熊くまが谷い土手から降りましたのがその時は篠しのを乱すような大雨でございまして、俵くるまたよりの便も得られぬ処から、小宮山は旅馴れてはいる事なり、蝙蝠傘を差したままで、湯島新花町の下宿へ帰ろうというので、あの切きりどおし通かかへ懸かかりました時分には、ぴったり人通りがございませぬ。後うしろから、

「姐さん、参りましょうか、姐さん。」

と声を懸けたものがある。

振返つて見ると誰も居ませんで、ただぎあぎツという雨に紛わだちれて、轍わだちの音は聞えませぬが、一名の車夫が跟ついて来たのでありました。

小宮山は慄然ぎよつとして、雨の中にそのまま立停たちどまつて、待てよ、あるいはこりや託ことづかつて来たのかも知れぬと、悚然ぞつとしましたが、何しろ、自宅へ背負しよい込んで妙ならずと、直ぐに歩あゆみを転じて、本郷元町へ参りました。

ここは篠田が下宿している処であります、行馴かどぐれている門口ち、猶予ためらわず立向うと、まだ早いのに、この雨のせいか、もう

閉つておりましたが、小宮山は馴なれている、この門と並んで、看護婦会があります、雨滴あまだれを払いながらその間の路地に入ると、突つきあたり当つの二階が篠田の座敷、灯も点ついて、寝ない様子。すると

まだ声を懸けない先に、二階ではその灯を持って、どこへか出たと見えて、障子が暗くなりました。しばらく待っていても帰りま

せぬ。

下へ下りたのであろうも知れぬ、それならばかえって門口で呼ぶ方が早手廻しだと、小宮山はまた引返して参りますと、つい今錠の下りていた下宿屋の戸が、手を掛けると訳もなく開あきましたと申します。

何事も思わず開けて入り、上あがり櫃がまちに立ちましたが、帳場に寝込んでおりますから、むぎとは入らないで、

「篠田、篠田。」

と高らかに呼よばわりますると、三声とは懸よけさせず、篠田は早速に下りて来て、

「ああ、今帰ったのかえ、さあさまあ上りたまえ。」

と急遽^{いそいで}先に立ちます。小宮山は後に跟^ついて二階に上り、座敷に通ると、篠田が洋燈^{ランプ}を持ったまま、入口に立^{たちどま}停^どつて、内を透^{すか}し、「おや、」と言つて、きよろきよろ四^{あたり}辺^{みまわ}を^{して}おりますが、何か気抜のしたらしい。小宮山はずつと寄^よつて、その背^{せな}を叩かぬばかり、

「どうした。」

「もう何も彼^かも御存じの事だから、ちつとも隠す事はない、ただ感謝するんだがね、君が連れて来て一足先へ入ったお雪が、今までここに居たのに、どこへ行つたろう。」

と真顔になつて申します。

小宮山はまた悚然^{ぞっ}とした。

「ええ、お雪さんが、どんな様子で。」

「実は今夜本を見て起きていると、たった今だ、しきりにお頼み申しますと言う女の声、誰に用があつて来たのか知らぬが、この雨の中をさぞ困るだろうと、僕が下りて行つて開けてやったが、見るとお雪じゃないか。小宮山さんと一所だと言う、体は雨に濡れてびっしり絞るよう、話は後からと早速ここへ連れて来たが、あの姿で坐っていた、畳もまだ湿っているだろうよ。」

と篠田はうろろしてばたばた畳の上を撫でてみます。この様子に小宮山は、しばらく腕組をして、黙つて考えていましたが、開き直つたという形で、

「篠田、色々話はあるが、何も彼も明日^{あした}出直して来よう、それま

でまあ君心を鎮めて待つてくれ。それじや託り物を渡したぜ。」

「ええ。」

「いえ、託り物は渡したんだぜ。」

「託り物つて何だ。」

「今受取つたそれさ。」

「何を、」と篠田は目も据らないで慌てております。

「まあ、受取つたと言つてくれ。ともかくも言つてくれ、後で解る事だから頼む、後生だから。」

魂の請状うけじょうを取ろうとするのでありますから、その掛引は難

かしい、無暗むやみと強いられて篠田は夢現うつつとも弁えずわかま、それじやそう

よ、請取つたと、挨拶があるや否や、小宮山は篠田の許もとを辞して、

一生懸命に駈出した、さあ荷物は渡した、東京へ着いたわ、雨も
 小止こやみかこいつは妙と、急いで我家へ。

翌日取も置とりかず篠田を尋ねて、一部始終くわ詳しい話を致しますと、省みて居所も知らさないでいた篠田は、蒼くなつて顫ふるえ上つたと申しますよ。

これから二人連名で、小川の温泉へ手紙を出した。一週間ばかり経たつて、小宮山が見覚みおぼえのあるかの肌に着けた浴衣と、その時着ておりました、白粉垢おしろいあかの着いた袷あわせとを、小包で送つて来て、あわれお雪は亡なくなりましたという添状。篠田は今でも独身ひとりで居おります。二人ともその命日は長く忘れませんと申すのであります。

飛んだ長くなりました、御退屈様、済みませんでございました、失礼。

明治三十三（一九〇〇）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成²」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第五卷」岩波書店

1940（昭和15）年3月30日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

湯女の魂

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>